

技術士 2 次試験合格体験記（上下水道部門）

はじめに

令和 7 年 3 月 14 日に令和 6 年度技術士 2 次試験の結果が発表され、無事合格することができた。合格までの道のりは順風満帆ではなく、令和 5 年度試験では筆記で不合格となっている。そんな私であるが、多くの先輩から助けも得ながら今回の合格に漕ぎ着けており、助けを得た身として合格までのノウハウを自分だけで留めておくのはフェアではないと考え、合格体験記を今回執筆することとした。今後、技術士になりたいと考えている方の参考になれば幸いである。

技術士を目指すきっかけ

技術士を目指すきっかけの多くは仕事そのものや昇格に必要なだからというものが多いただろうが、私の場合は少し違う部分がある。というのも、私自身は学部生の頃からコンサルタントにならずともいつか取るだろう資格として技術士を認識しており、技術士になるのは工学者として当然と考えていた。

私が学部生時代を過ごした日本大学生産工学部環境安全工学科には、エンジニアリング会社出身で指導教官であった五十幡弘先生（総監・建設）や企業の研究所出身の鶴澤正美先生（建設）、純粋なアカデミアである今村宰先生（機械）、坂本恵一先生（化学）といった技術士の方々が教鞭をとっており、出身や分野を問わず専門性の証明として技術士を取得されていた。また、進学した東京都立大学の大学院でも小泉明先生（上下水道）が技術士であったりと技術士を取得しているのが当たり前という普通の大学生とは違う大学生時代を過ごした。そして、前職で直属の上司であった鈴木真介（@shinsuke_suzu）（総監・建設・上下水道）さんも含め技術士のみなさんが単純に格好良く映り、いつかはこうした皆さんのように専門家として活躍したいという強い思いがあったのである。

一次試験合格後～令和 5 年度試験

試験対策は一次試験に合格した 2021 年 11 月から開始した。私は博士卒であり、博士時代の 3 年間は経験年数に加算されないため、受験資格を得るにはあと 1 年が必要な状況だった。そこで、技術士試験合格までに向けた 2 年間のスケジュールを作成し、まずは社内勉強会で共通科目の対策に注力した。具体的には、講師が作成した 10 種類の想定問題に対して回答を作成し、それを合格レベルまで添削いただくというものであった。共通科目の対策完了後は、鈴木真介さんが主催する部の勉強会で専門科目の想定問題の回答・添削を繰り返した。こちらは専門知識（1 枚）×28 問、応用能力（2 枚）×12 問、課題解決能力（3 枚）×7 問の回答を作成して添削を受けた。また、これらと並行して過去問の回答作成も行った。勉強時間は平日 1 時間/日、休日 2 時間/日は必ず確保し、どうしてもできない場合は別日で埋め合わせるようにした。

こうして 2 年間の間に 380 時間程度を試験勉強に費やし、もうこれ以上対策できることなんてないという気持ちで令和 5 年度試験の当日を迎えた。試験自体も時間的に厳しい部分はあったものの、しっかり読めるレベルの回答を作成することはできた。あとは採点者次第だなという感触で迎えた合格発表日、結果は不合格であった。採点結果は共通 A、専門知識・応用能力 A、課題解決能力 B で総合 B という非常に悔しい不合格であった。この日は鈴木さんと初台で反省会を開いたことを覚えている。後の復元回答の講評でも指摘されていたことであるが、基盤強化（ヒト・モノ・カネ）の設問に対してやや逸れた耐震化について厚く記載

してしまっていたことが敗因であった。一発合格を目指していた私はここで一度モチベーションを失うこととなる。

令和5年度試験不合格～令和6年度筆記試験

不合格でモチベーションを失った私ではあるが、とりあえず令和6年度試験の申込みをして悶々とした新年度を迎えていた。そんな5月に請求していたことすら忘れていた試験の得点開示が自宅に届き、わずか3点足らずで不合格となっていたことが判明したのだ。原因が選択3の記述方法がまずかったことにあることは明確であり、悔しさよりも次回こそ合格できるという気持ちが私を奮い立たせた。そういった理由から、この日から技術士試験対策を再開した。試験までの3ヶ月でできることは限られており、過去の2年間で相当の対策はとっていたので、この2ヶ月は令和5年度試験の回答作成やキーワード表の作成に注力した。また、試験当日は設問の読み込みと骨子の確認に割く時間を増やし、そもそもの間違いを避けるように留意した。こうして昨年とほぼ同じ手応えで試験を終え、とりあえず合格発表までは仕事に注力する日々を過ごした。そういえば、毎年の試験で選択肢の1つとして新出テーマが出てくるが、わざわざ対策していないのにこれを選択するのは事故の原因となるので避けたほうが無難だと思う。

筆記試験合格～面接

仕事が忙しくなってきた10月末、筆記試験の合格通知が届いた。口頭試験日は12月22日と残り1ヶ月とちょっと。過去の口頭試験問答集と受験申込書の業務詳細から独自の想定問答集を作成し、試験前3日で数回程度問答集を見返すという対策をこなして口頭試験当日を迎えた。なお、この間は模擬面接は行っていない。普段の客先協議も一人で行っていたので、それ以上の面接対策はないという判断をした。

こうして迎えた口頭試験当日、14時に会場に着くと、先に面接を終えた研究室の後輩である大谷真也さん（NJS）に出会い少し談笑した後、直前の準備をして15時から試験が始まった。試験自体は業務経歴の修正からはじまり、業務詳細の説明は求められずにリーダーシップやマネジメントの質疑応答から入った。その後に技術面の深堀り、CPD、評価、3義務2責務と話は続き、最後は談笑で3分程を過ぎ面接が終わった。唯一の心残りとしては、評価の場面で統計値の活用についてP値などの統計的検証を実施したことを十分に説明できなかった点がある。ただ、全体的には手応えを感じ、合格発表まで悶々とする日々を過ごした。

合格発表

仕事が再繁忙期を迎えていた3月14日の朝6時、寝ぼけた状態で技術士会のHPで自分の受験番号があることを確認し、とりあえず寝た。その後、朝のルーティンをこなして仕事を始めると、10時の時点で私の合格を祝うメールが数件届いていた。官報で私の名前が合格者として出ることをすっかり忘れていた。それから官報や水道新聞での発表を見た業界の知人からお祝いのメールが届いた。それだけ凄いことなんだと感じながら、まずは眼前の業務を納品するために仕事に戻っていった。

試験に合格するために必要なこと

今振り返ると私が技術士試験に 32 歳という比較的早い年齢で合格できたのは以下の要因があったかと思う。

- ・試験勉強にしっかり 500 時間程度かけたこと（ただし、修士・博士時代も水道計画の研究に従事）
- ・普段から主担当者として客先協議の説明を数十案件もこなしていたこと
- ・浄水場再構築の基本計画という技術的に高度な業務を担当して業務が表彰を受けていたこと
- ・1 年計画ではなく、2 年計画で無理せず自分のペースで計画的な対策を進めたこと

要は試験対策だけではため、普段の業務も主体的にしっかりやりましょうということである。より具体的にいえば、定型業務であれば上司から離れて独り立ちできるレベルにはなっておきたいことである。

他の事例は知らないが、建設コンサルの技術者としては、いずれも主担当として施設設計なら中大規模浄水場、管路設計なら非開削や複雑な構造形式の水管橋、計画なら浄水場の再構築やビジョン・アセット・経営戦略の複合業務といったレベルの経験は技術士にふさわしい業務として経験しておきたい。

技術士となったこれから

よく言われることであるが、技術士登録はスタートでしかない。これからは技術士としてより非定型な業務の比率を増やし、後進の育成により関与することは私の当初の計画にあったし、実際にそのとおりになってきている。また、上には上があり、私の合格と同日に総監部門で研究室の先輩や元上司が合格していたり、前年に上水道で合格した方が下水道でも合格していたりする。自己研鑽の継続は技術者として当然であり、水道研究発表会での発表などを継続するとともに、総監の合格を次の目標として勉強を再開する。

最後に、試験の合格に向けて多くの支援をいただいた鈴木真介（@shinsuke_suzu）さんをはじめとした勉強会のメンバーには大変お世話になった。今考えればこれも私の目指す後進育成の一つの形であり、私もいずれかは OJT や Off-JT をとおして高度な技術を有した技術者の育成に関与していきたい。